令和６年度中学生・高校生の国際理解・国際交流論文

高等学校の部　最優秀賞

はじめの一歩

福島県立原町高等学校

２年　荒　蒼依

将来、国際協力機関で働きたいと思っていた私にとって、「国際交流」とは、世界中で起きている国際的な問題を解決するために必要な個人的なものというのが最初の印象でした。私は以前から、海外留学に興味を持っていました。それは、生の英語に触れて英語力を向上させること、そしてそれ以上に、異文化の中に身を置くことによる自分自身の成長を期待するからです。日本にいるのと比べて桁違いの多様性の中で、私自身に化学変化のようなものが起きるのではないかと考えています。

今年の８月、そんな私にとって魅力的なチャンスが２度ありました。

１度目は、アメリカからの留学生を受け入れた友人に誘われ、アメリカの高校生との交流の機会を得られたことです。それは、私にとって願ってもない機会でした。その場に立つと、やはり緊張しましたが、思いきって話してみると、思いのほか意思の疎通は難しくなく、会話が成立することに喜びを感じました。文法や単語の正しさ以上に、話そうとする姿勢こそが大切なのだと気付かされました。好きな音楽や学校でのこと、流行りのメイクのことなどで会話が盛り上がり、改めて同じ高校生なのだと感じました。後日、同じメンバーで花火を見に行きました。２度目になるこの時には、以前からの友人のような気軽さでコミュニケーションがとれました。この体験は、私に、国際交流が個人と個人との交流であることを改めて教えてくれました。もしかすると私は、「国際交流」とはこうあるべきだと先入観を持ち過ぎていたのかも知れません。

２度目のチャンスは、医師の中村哲さんのドキュメンタリー映画を見る機会に恵まれたことです。私がそういう機会を求めていることを知っている父が、勧めてくれたのです。中村哲さんについては、たまたま英語の教科書にも取り上げられており、少しは知っているつもりでした。中村さんが、地域の山岳会でパキスタンを訪れたのをきっかけに、医療環境が十分に整っていない地域での医療に携わるようになったことや、その活動の舞台がパキスタンからアフガニスタンに移ったこと、医療行為以外にも土木工事などに携わったことなどです。しかしこのドキュメンタリー映画を見て、私は「国際交流」について何も分かっていなかったのだと思い知らされました。

ドキュメンタリー映画には「議論は無用、実行あるのみ。」と言いながら、現地に住む一人の人間として活動する中村さんの姿がありました。中村さんが医師であることは間違いないのですが、映画には、人々をまとめる地域のリーダー、設計士、大工、様々なアイディアからものを生み出すクリエイターなどの、たくさんの顔を持つ中村さんが映っていました。そうした医師以外の顔のインパクトが大きすぎて、時折出てくる診察の場面の方に、何か違和感のようなものを感じたほどです。

この映画は、中村さんの偉業を私たちにたくさん伝えてくれるものでした。しかし、それ以上に私の胸に強く残ったのは、現地の人に完全に溶け込んでいる中村さんの姿でした。私は時々、スクリーンの中にいるはずの中村さんを見つけられなくなりました。なぜなら中村さんは、現地の人と同じような服を着、ともに食べ、語り、そして笑っていたからです。中村さんの姿は、支援を「与える」人ではなく、コミュニティの一員として自分たちの生活をより良くしようとする一住民に見えました。国際交流は、個人と個人との交流を超えて人の持つ文化や精神の関わりを大切にすることが基本なのだと思いました。私は、「国際交流」という言葉の自分の中の定義が変わってきたのを感じました。

中村さんの人付き合いには、一つのコツがありました。それは、現地の人の輪に入っていくときに、自分をさらけ出すことです。見知らぬ外国人が現れれば、どこの人間でもその人が何者かを知ろうとします。きっと中村さんもたくさんの質問を受け、それに答えるところから、交流をスタートしたのでしょう。疑心暗鬼という言葉があるように、相手への理解不足は、無用の不安や警戒心につながり、それは建設的な交流を妨げます。中村さんの姿勢は、まさに国際交流のお手本でした。

世界に目を向ければ、互いの理解不足が不幸な衝突につながっている例は、枚挙に暇がありません。ロシアとウクライナの戦争状態、そしてパレスチナとイスラエルの衝突などは、その最大のものと言えるでしょう。未だ解決の糸口が見えない衝突ですが、私には、両者の言い分のどちらにも一理あるように思えます。歴史的な背景などを考えれば、そう簡単ではないことは承知しています。しかしそれでも、互いに自分をさらけ出し、誠実に話し合うことで、武力衝突以外の道を探れるのではないかと考えます。

中村さんの生き方は、私たち人類に、それが不可能ではないことを教えてくれているように思えてなりません。「もう銃を持たなくていい。･･･アフガン人男性は畑でほほえんだ。･･･家族があたたかな食卓を囲む。人間の暮らしが戻った。平和には戦争以上の力がある。」という中村さんの言葉が胸に残りました。私たちは、いくら困難でもその道を探らなければならないと思わされました。

改めて８月の友人宅での留学生との交流を思い起こすと、最初の自己紹介の時に、私はもっと上手に自分のことや自分の考えを伝えられたらよいのにと、歯がゆい気持ちになっていました。これまで自分自身のことや身近な問題について、しっかり考えてこなかったことを痛感しました。私の場合は、そうしたことや言葉が通じないことが壁となっていましたが、国際問題に目を向けると、言葉だけでなく文化や宗教の違いが壁になっている現実があります。だから今こそ、国際交流が必要なのです。国際交流の本質は、文化や精神の繋がりであり、そこで大切なのは、相手に理解してもらえるように自分のことを伝え、相手のことも理解しようとすることだと思います。

私が一人の国際人として活動するために、今のうちにやるべきことがたくさん見えてきました。まずは足下や身近なところに目を向けながら、自国や他国の文化や精神について学びを豊かにしていこうと思います。

参考文献

○　希望の一滴　中村哲、アフガン最後の言葉　令和２年１２月　西日本新聞社
○　ドキュメンタリー映画「医師中村哲の仕事・働くということ」２０２２年　日本電波ニュース社